様式２　【生活様式などの無形のもの】

ふくしまの森林文化調査カード

県 HP公開（ 可・否 ）

区分	1．森づくり　2．森の恵み　3．森と技 4．森と暮らし　5．森の文化財　6．森の風景	
分野（ふりがな）	（分野） 和紙づくり	（ふりがな） わしづくり
地域独特の呼び方	―	―
タイトル	和紙づくり	
伝承地域	二本松市上川崎地区	
由来	（いつ、どこで、誰によって起こり、どのようにして現在まで（いつまで）伝えられてきたか） 「上川崎和紙」は、楮を原料とする手漉き和紙で、平安中期から始められたと伝えられ、「みちのく紙」と称されたといわれている。江戸時代、二本松藩が産業振興のために紙漉きを許可制にして奨励し、今日の上川崎和紙の基礎となった。	
内容	（内容と共に、行事・祭りの場合は実施の時期、郷土料理の場合レシピなども） 楮を皮が厚くなる 12 月に収穫し、束ねて大釜で蒸す。蒸しあがった楮を丁寧に手作業で皮を剥ぎ、寒風にさらし乾燥させる。　乾燥した楮を一晩水につけ柔らかくし、皮表面の黒皮をそぎ落とす。上川崎ではこの作業を「カズヒキ」という。「カズヒキ」したものを白皮と呼び乾燥させることにより保存することができる。　白皮を再び水につけ水洗いし、ソーダ灰などを使い半日ほど煮て柔らかい繊維にする。再度白皮を水につけ、ゴミやスジを取り除く。これを「カズダシ」という。冷たい川の水での手作業でとてもつらい作業である。　白皮を棒でたたき、繊維を細かくする。一日分の紙漉きに必要な量を細かくするには、叩くのにも一日かかる最も手間のかかる仕事である。現在は、「ピーター」と呼ぶ機械が導入されている。　水の入った「漉き舟」に楮を入れ、「マクワ」という道具を前後にゆすってかき混ぜ、さらにトロロアオイからとった粘液の「ネリ」を加える。「ネリ」の分量により漉き具合、漉き上がりが左右される、経験の必要な重要な仕事である。　漉いた紙を圧搾して水分を搾り取り、「紙つけ板」に貼付け、寒い外気にさらして乾燥する。現在は室内で乾燥機を使用している。上川崎では、主に男性が紙漉きをし、女性が紙干しを行っていた。　上川崎和紙は、様々な和紙製品に加工されている。平成 7 年「第 50 回国体」の表彰状に使用されたほか、今でも二本松市内の小中学校の卒業証書に用いられている。	
文化財等の指定状況	福島県重要無形文化財指定（平成５年）	
問い合わせ先	二本松市和紙伝承館　電話　０２４３－６１－３２００	

【継承活動を行っている方がいる場合】

個人	氏名（ふりがな）		※顔写真がありましたら、コピーか電子ファイルをご恵
	性別・年齢 生年月日	男　・　女　　歳 明治・大正・昭和・平成　　年　　月　　日　生	
	住所・電話	〒　電話	
	職　　業		
団体	団体名（ふりがな）	上川崎和紙繊細保存会	
	代表者氏名（ふりがな）		
	団体の設立年月日	明治・大正・昭和・平成　　年　　月　　日	
	問い合わせ先	電話	

キーワード

刈り取った楮を束ねて、蒸し、皮を剥ぎ、乾燥させる。

皮表面の黒皮を削ぎ落(「カズヒキ」)し、白皮を乾燥させる。

白皮を煮て柔らかくしして、ゴミやスジを取り(「カズダシ」)し、
叩いて繊維を細かくする。(「ピーター」を使ってのたたき)

「流し漉き」という方法で漉いた紙を、圧搾して水分を取り、「紙つけ板」で乾燥させる。

完成した上川崎和紙